

保育者の「見通し」について考える

—観察記録と保育者へのインタビュー結果を照合して—

渡辺 桜

(愛知教育大学 非常勤講師)

<研究目的>

前回の研究では、実際の保育場面を記録に留め、新任保育者とキャリアのある保育者とを比較考察した。そこから保育者の「見通し」に関する部分を抽出し、「見通し」を持つとはどういうことかを具体的にすることを目的とした。その結果、自分が今どこに重きをおいて援助すべきかを探り、その拠点として見出した遊びや場所でじっくりと子どもとかかわりつつも全体を把握するという視点をもつことの必要性が明らかになった。しかし、観察記録のみの分析は観察者の主観による判断であり、保育者が保育において何を意識していたのか照合することが今後の課題として残された。

そこで本研究では、保育場面の中で保育者と子どもとのやりとりを中心に記録に留めることに加え、観察終了後、その保育者にインタビューをし、それらを照らし合わせ、「見通し」をもつことは保育者のどのような子ども理解や意識のもとに生み出されるのか探る。

<研究方法>

① 保育観察

ア. 観察期間：2003年9月～12月

この期間に5回の観察を行った。

イ. 観察対象

愛知県C市立保育園、N市立幼稚園、私立幼稚園、T市立幼稚園（2回）計4園、3～5歳児クラス担任保育者8名。

ウ. 観察場面

子どもが登園してから食事の準備までの保育場面。

エ. 観察方法

異なる4園において、新任保育者2名とそれ以外の保育者6名を観察し、保育者と子どもとのやりとりを中心に記録する。

②インタビュー

観察終了後、「今日の保育の中で意識していたことがあれば教えてください。」とたずねる。

③観察記録の分析

観察後、記録をもとに、観察者がとらえた保育者の行為の特性を抽出する。

④観察記録とインタビュー結果から探る

保育の「見通し」

観察者が観察を通して「見通し」に関連しているのとらえたものが、保育者の意識下ではどう位置づけられているのかをインタビュー結果から探る。観察者のとらえかたと保育者との思いにズレがないか確認すると同時に、「見通し」の点で一致すると思われる部分がある場合、保育者のどのような意識が保育における「見通し」と関係してくるのかを明らかにする。

<結果と考察>

1. キャリアによる保育の「見通し」の違い

前回と同様、新任保育者2名は共通した行為の特性が見られたが、それ以外の保育者6名は経験年数の長短にかかわらず特性にばらつきがあった。そこで、後者6名の記録を中心に検討したところ、個々の子どもの要求に丁寧に応えながらも全体の遊びや子どものようすを把握しようとするのがうかがえる記録が2つあり、その記録から保育のキャリアが感じられた。従ってこの2名の保育者の記録を新任保育者と比較する対象として取り上げる。それぞれの保育者の内訳は以下の通りである。

A：新任保育者(2名)	B：保育のキャリアが感じられた保育者(2名)
●A1 保育者 (保育園) 3歳児 保育経験1年目	●B1 保育者 (幼稚園) 3歳児 保育経験10年目
●A2 保育者 (幼稚園) 4歳児 保育経験2年目	●B2 保育者 (幼稚園) 3歳児 保育経験34年目

図1、2は、保育者と子どもとのやりとりを時間の経過と共に保育キャリア別に比較対照したものである。キャリア別に保育の見通しの違いが明らかであると思われたA1保育者とB1保育者の記録1、2を基に図示した。(A1,B1,A2,B2 保育者の詳細な保育観察記録は当日配布資料参照)矢印が両側にあるものは、子どもの要求に基づいた保育者とのかかわりが成立していることを示す。矢印が一方のもの、子どもの思いに添っていないと捉えられたかかわり、破線の矢印は観察者が把握しきれなかった場面である。

2. 観察記録と保育者の保育に対する意識から考える保育の「見通し」

A1 保育者は、図1及び配布資料において破線で示

した通り、砂場、パラソル、水道を忙しく行き来している。その行き来の中でかかわったB男やB子の姿から、見通しをもってことばをかけたという印象は弱い。また、保育者を求めているA男には、あまり気持ちが向いていない。そして、A1保育者のインタビュー結果イ)ウ)から、一人でも多くの子とかかわらねば、いろいろな遊びのようすを把握せねばという思いやY男がトラブルを起こさないかという不安が伝わってくる。常に全体を見なくてはという思いにかられているために、かかわるべき子や遊びを見つめようとする視点が不十分になっていると推察される。

B1保育者は、図2及び配布資料において下線で示した通り、A男、C男、Y男、F子らと丁寧にかかわりながらも、クラス全体に目と気持ちを向け、自分が

保育者の言動	関わった遊び:子ども:子どもの言動
10:16「わーAちゃんすごいのができた…」	←→ 砂場: A子: 保育者のもとに自分で作っただんごを持ってくる
10:18 A男の声に気づかない	←→ パラソル: ← 砂場: A男: 「先生みとってー。せんせーい」
10:22	←→ 水道: ← 砂場: B子: 照れくさそうに団子作りを続ける
10:23「わ!さらさら砂かけとるー」「Bくん埋めてるの?」「わー流すの?すごいー」	←→ 砂場: B男: 面倒くさそうに「きれいにしてるの」 ← 砂場: A男: 「先生みてー」
パラソルの方が気になり、ちらちらと見ている	←→ パラソル:
10:24	←→ 砂場: B男: 無反応
10:40「わー(砂が)いっぱいになってる」	

図1 新任保育者A1の言動及び子どもとのやりとり

A1 保育者のインタビュー結果

- ア) 外遊び中、お茶をテラスの方へ飲みに来る子もいるので、全体が見えるよう他の保育者と声を掛け合い、連携する。
- イ) 遊びがバラバラなので、全体の子に声がかけられるように気をつけていた
- ウ) とくにケンカをしやすいY男がどこにいるかは気をつけていた

声をかけるべき子やかかわるべき遊びを考え、そのタイミングを探っている。B1保育者のインタビュー結果ア)から、具体的な遊びに対する見通しが、イ)からS男への具体的な援助が挙げられており、A1保育者との違いとなっている。

保育者が「見通し」をもって保育をするためには、個々の子どもやクラスの遊びの状態を把握しているという土台のもとに、今かかわるべき子や遊びを見極め、援助していくことの重要性が示唆された。

今後は、保育者の子ども理解や発達に対する理解をより具体的に明確にし、それらの理解がどのように保育の「見通し」となって援助に生きてくるのかを追求していきたい。

保育者の言動	関わった遊び:子ども:子どもの言動
9:37「すごい。バンバン」	←→ 空箱製作: A男: 製作物を保育者に見せに来る
9:42「お店屋さん、沢山ごちそうができたみたいよ」「すごい、空もとんじゃうんだー」	←→ ピクニックごっこ: お店やさんごっこをしている女兒と合流、遊びがふくらむ
9:50「…Yちゃんここまで持ってきたんだもん、ここに入れよう」	←→ 空箱製作: C男: 「ここからミサイル出てくるよ」⇒うれしそうに製作物を手に保育室に入っていく
9:51「お母さんあそこの大切な物がでたままですよ」	←→ 砂場: Y男: 使った物を倉庫の前までは持ってきたが、決められた場所には戻さず無造作に置く⇒保育者と一緒に片付ける
9:56「あと少し!がんばれ…」	←→ ピクニックごっこ: F子: 赤ちゃんに見立てた人形などをもとの場所に片付ける
	←→ ブロック: 片付け始める

図2 保育のキャリアが感じられた保育者B1の言動及び子どもとのやりとり

B1 保育者のインタビュー結果

- ア) 先週よりピクニックごっこ、お店屋さんごっこ、空箱製作が盛り上がっていたので、今日はこれらの遊びが中心になっていくと予想し、かかわっていった。
- イ) 登園時、S男が母親と離れられなかった。S男が落ち着くまで母親と保育者と砂場で遊ぶことにする。9:20頃S男が落ち着いてきたので、午後のクッキングの準備をするねと声をかけて保育室に戻った。